

交響するジャンル意識

－日本におけるビリー・ワイルダー作品受容を中心に－

文化創造専攻 創作表現専修

21001ASM 浜田 健太郎

修士論文要旨

本修士論文では、1950年代から1960年代にかけて、日本の映画作家や批評家たちがどのようなジャンル意識を持っていたのかを、同時期のビリー・ワイルダー作品の受容を手掛かりとして探っていく。第1章では日本映画とアメリカ映画との関係性について論じた先行研究が少ないこと、ワイルダーの作品群がそのジャンルの多彩さについて触れられていながらも、「コメディ」についての言及が多く、日本において1940—1950年代前期に公開された一連のシリアスな作品については例外的なものとして認識されているような状況を確認した。

第2章で現在は「フィルム・ノワール」と呼称されている3作品の受容について検討した¹。公開当時「スリラー」とされたそれらは、主要登場人物の心理や言動の演出に高評価が与えられていたり、ヒッチコック作品と演出の面で比較されていたりする。当時「スリラー」はヒッチコック作品を筆頭に流行したジャンルであった²。比較されたのはこのためである。一方「スリラー」は俗なものともみなされていた³。こうした状況下で「リアル」さが高評価を得たことについては「セミ・ドキュメンタリー」というジャンルから考える必要がある。これは実際の事件を題材に、ロケーション撮影によって製作されるような作品を指すジャンル名であるが、日本においては前者の要素はあまり重要視されず、後者の要素のある作品について用いられていた⁴。先行研究はこの「セミ・ドキュメンタリー」が、前述のような俗的な「スリラー」の中であって、現実を映していることで高く評価されたことを紹介している⁵。評価されたワイルダーの「スリラー」作品の中には「セミ・ドキュメンタリー」そのものもあれば、現実と接続して受け止められたものもあった。日本における「スリラー」や「セミ・ドキュメンタリー」作品の作り手もまた「リアル」を志向していた。「スリラー」というジャンルの内部では、こうしたヒッチコック作品や「セミ・ドキュメンタリー」のようなものに対する意識が交響しているといえる。

第3章ではワイルダーの「コメディ」作品群について検討した。先行研究では、現在幾つかの作品が「ロマンティック・コメディ」というジャンルに位置づけられている⁶。しかし同時代評ではその語はほとんど登場せず、代わりに「風俗」という語が複数回用いられている。同時期の日本映画には「風俗映画」と称される作品群があり、それらはその時代のさまざまな事

柄について表層的にとらえたものであるとされる⁷。例えば、マリリン・モンローの出演した2作に「風俗」について言及した記事がある。オードリー・ヘップバーンの出演した2作は劇中の衣装という「風俗」が注目されていた。「サラリーマン喜劇⁸」という「風俗映画」のバリエーションのひとつともいえるジャンル名が与えられたものもあった。またワイルダーの「コメディ」作品を取り上げた書籍に「艶笑ばなし⁹」という語が存在した。それは「性風俗¹⁰」と関わっている。ここからワイルダーの他の「コメディ」作品を総覧したところ、その傾向を確認できた。また、日本映画における「風俗映画」の批評からはこのジャンルを軽視する傾向が見て取れた。これらの検討からワイルダーの「コメディ」には、当時「風俗映画」的な評価が与えられていたといえる。「風俗」という語には、ヘップバーンの衣装のような「風俗」をとらえたものや、モンローの身体やその振る舞いに代表される性的なニュアンスを含んだ「性風俗」的事象とが混在していたと考えられる。

終章ではここまでの検討を振り返り、「スリラー」における「セミ・ドキュメンタリー」、「コメディ」における「風俗映画」という当時流行のジャンルが新たに発見できたことを基に両者を対照させ、検討した。この2つのジャンルから見出されるのは「記録性」と「現在性」という、互いに交響し合う意識である。「記録性」の強い「セミ・ドキュメンタリー」は現実の社会の問題を描けるため肯定され、「現在性」の強い「風俗映画」は「表層」しかないと批判される。しかし「風俗映画」は「現在性」が強いが故、その時代の象徴を捉えるのに長けたジャンルと見ることもできるのだ。

最後に本稿で取り上げた映画作家の多くが現在顧みられにくい状況であることを指摘し、その要因を彼らのフィルモグラフィにおけるジャンルの幅広さに見出した。彼らの再発見と再評価につながるものであることを提示し、結びとした。

¹加藤幹郎『映画ジャンル論 ハリウッド映画史の多様な芸術主義』（文遊社 2016年）p.415,423-424,431の記述を参照。

²肥山紗智子「戦後映画史にみる和製「スリラー映画」の萌芽とその音楽：『野良犬』における「対位法」の役割」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』2018年 p.2。

³同上。

⁴肥山前掲書 p.5。

⁵肥山前掲書 p.6。

⁶瀬川裕司『ビリー・ワイルダーのロマンティック・コメディ「お熱いのがお好き」「アパートの鍵貸します」「昼下りの情事」』2012年 平凡社 p.357-358。

⁷小倉史「『風俗映画』と『現在』のモビリティ——川島雄三と風景の変わり目」『表象文化論研究』（5）東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻表象文化論コース2006年 p.108。

⁸草壁久一郎「芸術：映画評＝アパートの鍵貸します」『毎日新聞』1960年10月14日夕刊 p.5。

⁹増淵健「ビリー・ワイルダーの世界」『世界の映画作家33 ルビッチュとワイルダーとアメリカ喜劇』キネマ旬報社 1976年 p.103。

¹⁰『大辞泉 上巻あ-す』第二版 小学館 2012年 p.455。